



平成 29 年度 海洋水産資源開発事業 〈いか釣：日本周辺海域〉の調査結果概要



調査船：第五十八長功丸（183 トン）

調査期間：平成 29 年 8 月 1 日～平成 30 年 2 月 28 日

調査海域：日本周辺海域

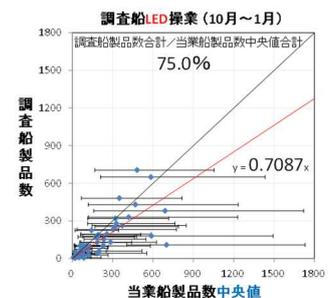
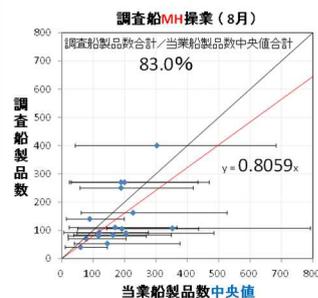
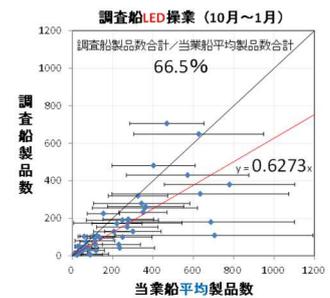
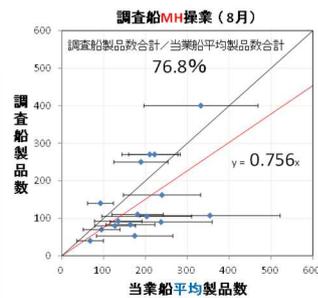
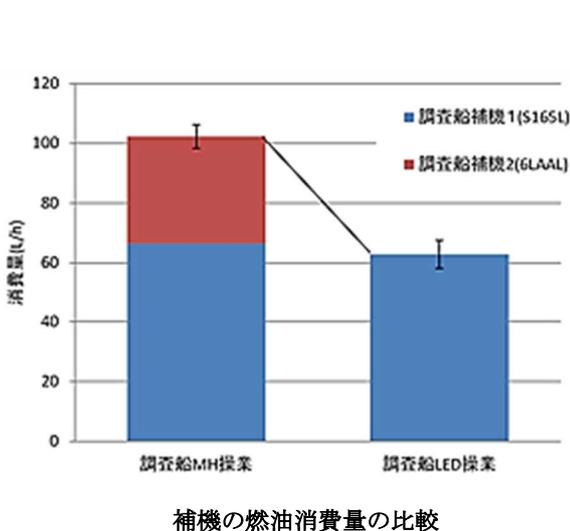
ただし、外国 200 海里内、指定漁業の許可及び取締り等に関する省令第十七条別表第二で定められたいか釣り漁業の禁止海域を除く。

本調査の目的

いか釣り漁業では、漁灯として水銀灯の一種であるメタルハライド（以下、MH という）灯が広く利用されている。しかし、MH 灯による燃油消費量はいか釣り漁船の燃油消費量全体の約 30～40%と大きな割合を占め、これが燃油価格の変動による経営の不安定化の要因となっている。また、我が国は 2016 年にパリ協定を批准し、2030 年度までに温室効果ガス排出量を 2013 年比で 26%削減する目標を掲げており、本漁業の燃油消費構造の転換が社会的にも求められている。このような状況の下、省エネルギー型漁灯を用いた効率的操法を確立することにより、いか釣り漁業の収益性改善に資することを目的とした。

本年度調査の主な成果等

平成 29 年度の調査では、LED 漁灯のみを艦装した調査船の放射照度を当業船（MH250kW）の放射照度に可能な限り近づけて、夜間に当業船と比較操業を行った。その結果、夜間操業時船上灯点灯に使用する補機の平均燃油消費量は、MH 漁灯に比べて約 4 割削減できることを確認した。漁獲量は日本海のスルメイカ操業では、当業船平均の 8～9 割の漁獲を確保しており、太平洋のアカイカ操業では、当業船の平均の 1.2 倍の漁獲を得ることができた。



調査船と当業船の夜間操業製品数の比較